

拝啓 1月もはや下旬、春が近いことを感ずる日もあるこの頃です。お変わりございませんか。いつもエンカウンターをお読みいただきありがとうございます。近所の公園は、今は椿か山茶花が咲いているくらいで、花が少ない時期です。

今月は、小西先生の『ローマ人への手紙講解説教』の第9回目です。復活の恵みを特に強調されます。

今井館の集会室をお借りして月に2回開いている高円寺東集会では、今年の1月から3月までは、小西先生が、クリスマスとか復活節のような特別な機会に話された特別説教を聞くことにしております。ロマ書講解が行なわれたのとはほぼ同じ時期の説教ですが、実に迫力があり、深い感銘を覚えます。昭和40年代に高円寺東教会へ通っていた頃、小西先生は、みかけは小さなみすぼらしい教会の牧師だがすごい牧師だと思っておりましたが、この頃はますますそう感じます。パウロ先生も、ご存命中は、シラスとテモテの二人ぐらいの弟子を連れて、あの広大なトルコの大平原をとぼとぼ歩いて伝道していたみすぼらしい使徒の姿であったに違いないと思います。

話は変わりますが、私は手紙を受け取るのも出すのも大好きですが、これは昔イギリスに留学していた頃、日本からの手紙が特別にうれしく、手紙を受け取るためには、せっせと出さなければいけない、ということに気がついて以来のことです。

以前バークレー先生の「一日一章」で紹介したことがあります。バークレー先生の「一日一章」の1月23日の所に次のように書かれています。

「私は今アメリカから一通の手紙を受け取ったところである。私の知らない婦人からのものだが、封筒の裏にこう書いてある。

手紙よ、野越え山越え海越えて行け  
お前を運ぶすべての人を、神よ、祝し給え、  
目的地なる家の人々、  
とりわけ宛名の人を、神よ、祝したまえ。」

エンカウンターを受け取られる皆様の上にも同じ恵みがありますように。

『南原繁の生涯』については、石井和夫さん達の読書会のグループで、南原先生当時の大学生に小学校低学年であった鼻たれ小僧の私がお話し申し上げると言いながら、お話しする機会を頂きました。皆さん大層喜んで下さいました。

もうすぐ春ですが、お身体ご自愛のほど、祈り申し上げます。 敬具

平成25年1月28日

山口周三

エンカウターの読者各位